

多義的次元形容詞の構造とその導入に関する一考察

— 現代日本語形容詞「高い」への観察から —

西内 沙恵 (立教大学)

A View on structure of polysemous dimensional adjectives
and their introduction:An observation on a contemporary Japanese adjective “*takai*”

Sae NISHIUCHI (Rikkyo University)

キーワード： 次元形容詞, 多義性, 場所名詞, 用法基盤モデル

Keywords : dimensional adjectives , polysemy, locative nouns, Usage-Based Model

SUMMARY

Adjectives are generally introduced in the early stage of introductory level in the field of Japanese language education, and they have been assumed that they have concise structures. However this is not always the case. This paper focuses on an special adjective “*takai*” that have polysemy as follows: high, tall, expensive etc.. In this paper, I attempt to propose an introduction of adjectives from a viewpoint of the Usage-Based Model (Tomasello, 2003).

1. はじめに

形容詞の用法は、日本語教育において初期に導入される項目であり、動詞ほどその用法は多岐に渡っていないため、しばしば簡潔なものとして認識される。すなわち、形容詞は多くの場合、叙述用法と修飾用法の観点から言及されるのみであり(小矢野, 2005, p. 70)¹、その構造は比較構文や副詞的用法の学習の際に振り返られる他は、あまり顧みられる機会がないものと思われる。しかしながら、形容詞文の構造は必ずしも単純なものとはいいがたく、本稿では基本的な形容詞の中でも特殊な構造を有する現代日本語形容詞「高い」に着目して論ずる。

- (1) 彼女は高い。
- (2) 彼女は背が高い。
- (3) その靴は高い。
- (4) その靴はヒールが高い。

「高い」はその中心義として、上方に隔たりがある次元の意味（以下<次元性>）を有するとされ、尺度性のある<価値>や<度合い>の意味も派生義として表出する。(1)から(4)は、現代日本語において容認度の高い、「高い」を用いた叙述用法の作例である。インフォーマント調査²によれば、(1)は「彼女とデートすると、いい店に行かなければならず、高くつく」や「彼女がサービス業に従事していて、サービスを受けるために高い料金を要する」ことを意味する文として解釈された。(3)は「靴の値段が高い」を意味し、(1)(3)はいずれも<価値>の意味を表出する。一方、彼女の「背の高さ」や靴の「ヒールの高さ」といった<次元性>の表出にあたっては、(2)のように「彼女」を、(4)のように「靴」を「は」で参照点として示され、が格³によって「背」、「ヒール」という<次元性>を受け一部分が指定されることが必要となる。「高い」に見られる中心義の捉えられ方とその意味の表出のされ方は、靱山（1995）で提案される、プロトタイプの意味の認定方法である『多義語の複数の意味のうち、用法上制約がない、あるいは少ないものをプロトタイプの意味と認定し、用法上制約のあるものを非プロトタイプの意味と考える』（靱山, 1995, p. 624）という手法に沿うものではない。<次元性>はプロトタイプ的な中心義とされるのにも関わらず、その表出にはが格の補完という用法の制約があるためである。さらに、基本的な形容詞であるのにも関わらず、広く認められるプロトタイプの選定方法から逸脱する現象が「高い」に現れる点も興味深い。本稿では、「高い」が基本的な次元形容詞⁴の中でも用法が多く特殊であるため、他の次元形容詞を扱う上でも最重要の項目の一つであると考え、研究のとば口としてとり上げる。

日本語教育において「は」の参照点指定とが格の部分指定の構造は、「文中の主題に関する特定の点について記述する際に用いられるもの」と抽象化されながら、(5)のように人物の外見や内面、(6)(7)のように場所や物の特徴を記述する個別的例を用いて導入される場合が多いと思われる。

- (5) 夏目さんは目が大きい / 背が高い / 頭がいい。
- (6) 東京は交通が便利だ / 人が多い。
- (7) この車はデザインが素敵だ。

本稿では、多義的次元形容詞「高い」の叙述文の構造を場所名詞の観点から明らかにした西内（2015）の分析を教育的観点から捉えなおし、学習者のより適切な受容と産出に向けたアプローチを提案したい。

2. 先行研究：「高い」の性質

「高い」は「低い」、「安い」などの非両立関係の反義語があることから、多義語であるとされる（国広, 1982）。加えて、代表的な次元形容詞の一つとして知られているように、その中心義は『上方への距離が大きい』（北原（編）, 2010, p. 1041）<次元性>とされ、そこから派生した多義として、温度などを修飾する<度合い>や、評判など上方方向に限らない方向性の尺度を示す<範囲>、値段などを表す<価値>の意味を有する。

「高い」への分析的記述としては、国広（1970）、西尾（1987）、服部（1968）、久島（2001）など数多く、その多くが<次元性>に特化した内容である。久島（2001）では、「大きい」や「明るい」、「あたたかい」、「まるい」などの知覚語彙を《物》と《場所》の捉えから体系化することを試みており、「高い」に関しては、《場所》や《地点》、本体の一部としての《場所》である《準場所》にまつわる<次元性>を中心に分類的に記述している。以上の先行研究は、「高い」及びその他の形容詞の<次元性>を体系的に捉える上で大変有用である。

2.1 用例の分析と仮説

西内（2015）では、2章であげた先行研究でなされる「高い」の<次元性>にまつわる記述を参考に、「高い」の<次元性>以外の意味の表出について、用例の分析から考察した。用例の分析から、「高い」の<次元性>を表出するための標識として、被修飾名詞が場所名詞⁵の性質を有することが関わっている可能性を論じた。なお、ここでいう場所名詞とは、森山（1988）で述べられている場所性を絶対的に有する名詞と相対的に有する名詞である。森山（1988）では名詞を、場所性が絶対的な名詞と相対的な名詞、非絶対的な名詞に分けられるものとして、3段階設定している。第一に、どんな場合にも場所としてしか使われず、場所化⁶されない、地名・集団・組織などの絶対的場所名詞がある。第二には、語用論的な相対性の観点が必要とされる「家」「机」「車」のような、一定の空間を有する実質名詞の段階を設けている。第三に、一般的に場所性がない「青さ」「正義」のような非実質的な名詞を絶対的非場所名詞としている。物名詞にも場所性を認められる根拠は、久島（2001）で言及される、周囲から独立した《物》であっても、人や物が存在するための空間になりうる特性に求められるだろう。

なお、被修飾名詞の特性として、普通名詞と固有名詞の別に関しても配慮が必要である。固有名詞が喚起するフレームが、普通名詞とは異なる特殊なものとされる（西村・野矢, 2013）ためである。

以下、(8)から(19)は資料体、中納言から抽出された用例である。例文中の下線は筆者によるもので、分析対象の「高い」を一重線で、被修飾語を二重線で示している。

- (8) ステージが高過ぎて、センター席からは中央ステージすらよく見えないような状態。(Yahoo! 知恵袋, 2008)
- (9) 空が高い。白い鳥も消えていた。(川端裕人, 2001, 『ニコチアナ』)
- (10) 峡は有名な天険で、かつては怖ろしい水難の場所であり、奇怪な岩が高く低く入り乱れていたという。(清岡卓行, 1986, 『李杜の国で』)
- (11) 中田島砂丘は波が高いから危ないんですよ・・・(Yahoo! 知恵袋, 2005)
- (12) 眼は細いのだが、鼻が高いので、顔が引き締まって小さく見える。(曾野綾子, 1995, 『極北の光』)
- (13) 諸事情があり実家には戻れない。選択肢として、1. アパートが高くても都内に住んだ方がいい。2. 何があってもすぐかけつけられる (Yahoo! 知恵袋, 2005)
- (14) 平和台の土地が高いことに対する僻みもおそらくあるのだろうけれども。(松本峰雄, 1940, 『人権と私たちの暮らし』)

(15) 給湯床暖房とこの断熱法を併用するとより暖房効果が高くなります。(濱口和博, 1992, 『プロも見落とす家づくりの急所』)

(16) ホッキ貝 (三百十五円) より赤貝が高いとはね。(Yahoo! 知恵袋, 2008)

(8)(9)のように被修飾名詞が絶対的に場所性を有する名詞の場合、<次元性>表出にあたって、が格の補完を要さない。

(10)(11)は絶対的な場所名詞ではないものの、相対的に場所性を有する名詞であり、これらも<次元性>表出に参照点を介した主格の補完を要さない。

一方、(2)(4)(12)⁷は「は」で示される題目が場所性を有さないために、一部を指定するが格の補完が、<次元性>表出に必要となったと考えられる。

その他、(13)のように場所名詞であるのにも関わらず、<次元性>が表出されない場合がある。文化的、慣習的に確立された百科事典的知識 (Langacker, 1987, 158-161) によって、ある場所における行動が前景化されるために、<次元性>の意味が表出されないと考えられる。百科事典的知識は Langacker (1987) に基づき、それぞれの程度が完全でないものも認められる慣習性、特徴性、一般性、内在性の4つの観点を参照した⁸。一般性と内在性が低く、慣習性と特徴性が高い場合⁹に、場所名詞の<次元性>が表層化しにくくなることを検証した。なお、(14)に見られる固有名詞に関しては、固有名詞に対する知識の有し方によって喚起されるフレームが異なり、普通名詞とは違った次元で意味が解釈されるものと考えられる。すなわち、場所に対して有する百科事典的知識に関らず、「平和台」を知っているかどうかで、表出する意味に差異が生じる。

(15)(16)のような場所名詞の特性を帯びない名詞の直接的な叙述では<次元性>以外、すなわち、<価値>などの意味が想起されることがうかがえる。この場合、<次元性>表出には、が格による補完が必要とされると考えられる。

以上のように、次元形容詞「高い」の現代日本語における多義のうち、<次元性>とその他の意味表出の別の基準を、修飾される名詞の場所的特性と百科事典的知識の観点に求められるものと考えた。そこで、<次元性>表出の構造を、仮説として(a)から(d)のように設定した。

- (a) 場所性を有する被修飾語に<次元性>を表出させる場合は、が格による補完は必要ない。
- (b) 場所性を有さない被修飾語に<次元性>を表出させる場合は、が格による補完が必要となる。
- (c) 場所性を有する被修飾語に<次元性>が表出しない場合は、百科事典的知識に基づく<次元性>以外の意味を想起させる背景がある。
- (d) 場所性を有さない被修飾語に表出する意味は、百科事典的知識に基づく<次元性>以外のものである。

なお、以上の仮説に当てはまらない例を(17)から(19)にあげた。(17)(18)は、被修飾語が場所名詞ではなく、<次元性>を表出している用例、(19)は被修飾語が場所性を有

し、が格による補完がなされている例である。西内（2015）ではこれらに対する記述は今後の課題としている。

- (17) ちょんまげ時代のは、枕が高くてもちゃんと眠れたのでしょうか？（Yahoo! 知恵袋, 2005）
- (18) そうすると、その積み木が高くなるにつれ、不安定になって、そのうちには崩れますね。（Yahoo! 知恵袋, 2005）
- (19) テーブルの高さが高すぎるのかなあ・・・と思ったりもします。（Yahoo! 知恵袋, 2005）

例外の構造の解明の他、「鼻が高い」といった表現¹⁰に代表される話者の観点への考察¹¹、他の「深い」「浅い」などの代表的な次元形容詞における事例に仮説の布疋が可能かどうかの検証において議論が不十分であり、課題は多い。しかしながら、個別的な特性がしばしば際立ち、学習においても個々の事例に基づいてなされるしかないものと捉えられることが多い形容詞においても、多様な産出と受容に向けて、抽象的なレベルでの用法説明が試みられるべきである。次章では、西内（2015）の観点を習得に役立てるアプローチに反映させ、教育的提案を示したい。

3. 考察

導入の提案にあたって、Tomasello（2003）で母語習得研究に関して提示された「拡張のネットワーク関係」が、第二言語習得における「高い」でも構成される可能性を踏まえる。すなわち、現代日本語形容詞「高い」における、が格の補完を要さない<価値>、<度合い>などの汎用的なインプットと<次元性>の意味でのインプットを通して、<次元性>とその他の意味が結合されながら用法が習得されることを仮定的に前提とする。

Tomasello（2003）では、ある表現が繰り返し用いられる中でパターンが抽出され、規則が構成されることが、母語の習得においてなされていることを、一語文、語結合及びピボットスキーマ、アイテムベース構文、抽象的構文という段階への観察から証明している。そこでは、用法基盤モデルが母語習得理論の観点からも妥当であることが実証されている。加えて、頻度が大きく関わっている点を考慮する必要についても述べており、頻度が高いことがその形式及び規則¹²の定着の目安になるとしている。なお、以上の考えは英語の母語習得に関する研究の成果に基づくものであるが、第二言語習得のプロセスの一部でも、上記とほぼ共通のメカニズムが存在することが、野田他（2001）で観察される。このことから、上の証明を日本語の第二言語習得にも応用できると仮定し、第二言語習得における言語処理のストラテジーとして、実際の言語使用に基づくボトムアップによって、規則の抽出及び使用を明示的に体験させることを提案したい。

2章で観察した、「高い」の<次元性>とその他の意味の用法の別を、修飾される名詞の場所性と百科事典的知識という特性から概ね見て取れる可能性があることを前提に、

具体的な手続きを提案する。表1は、2章で設定した仮説を表にまとめたものである。ここで着目すべき点は表の中で(b)が形式的に仲間はずれである点と、直接修飾の形式をとる(a)(c)(d)の中で(a)が意味的に仲間はずれである点である。

まず、ボトムアップを基礎付ける材料として、例文を提示する。例文の提示順序は、用法として基本的かつ単純な(a)(d)にあたるものからなされるべきだろう。(a)は場所名詞を直接修飾することによって<次元性>を、(d)は物名詞を直接修飾することによって<価値>などの<次元性>以外の意味を表出する点で、(b)(c)より簡明であるといえる。例文としては、(a)では「山」(d)では「果物」など、典型的な普通名詞から導入することで、学習者に被修飾名詞と表出される形容詞の意味の整理がされやすくなることが期待される。続いて、(b)の用例を提示し、最後に(c)の例を、(a)と区別しながら出すことができよう。(b)は産出において、(a)と(c)は形式的な違いがないためその意味の受容において、教育上重要と考えられる。以上の、被修飾名詞の特性と表出される意味の分類に基づく用法を発見するプロセスが、学習者に体験されることを目指した活動の実施を提案する。

表1 場所名詞を基準とした用法の区分

	場所名詞	物名詞
<次元性>表出	(a) 直接修飾	(b) が格の補填
<価値> 他 表出	(c) 百科事典的知識による場合、直接修飾	(d) 百科事典的知識による場合、直接修飾

以上の導入における手続きのまとめの例として、付録1を参照されたい。付録1は学習初期の段階を仮定し作成している。提案する導入の手続きは、対象となる形容詞の多義への認識、被修飾名詞の特性を学習者に捉えさせた上で、それらの特徴をまとめる表を完成させ、意味の表出の構造への解釈を導こうとするものである。

形容詞を導入するような学習初期において、複雑な構造を提示することは混乱を招くことが想定されるため、実施には熟慮断行の必要があるものと思われる。しかしながら、一般的な導入に用いられる個別的用例に加えて、それらの個別的事例から抽象的ルールを明示的に発見する手続きをとることによって、実践的かつ活発な産出と正確な受容が目指されるものと考えられる。

4. まとめ

本稿では、西内(2015)での次元形容詞「高い」の現代日本語における多義のうち、<次元性>とその他の意味の用法の別を、修飾される名詞の特性である場所性と百科事典的知識に求める考察を教育的視座から捉えなおし、その用法の導入手法について講じた。現代日本語形容詞「高い」の中心的な意味以外の<価値>などの意味の汎用性を受けて、Tomasello(2003)で論じられた「拡張のネットワーク関係」よろしく、<次

元性>とその他の意味がインプットを通して結ばれる仮定から、その体験を明示的なものにする導入を提案した。

謝辞

本稿は、西内（2015）の分析を教育的観点から再考したものである。分析に対してコメントを下された方々にお礼を申し上げますとともに、本稿執筆にあたって貴重なご意見をくださった野中大輔氏に末筆ながら心からの謝意を表したい。

注

¹ 活用を有し、日本語においては、とる格の観点から属性形容詞と感覚・感情形容詞に大別されるなど記述の仕方は様々であるが、ここではその用法に焦点を当て、とり上げている。

² 20代の日本語母語話者7名を対象に2014年11月に実施した。(1)から(4)の作例の他、日本語形容詞文の容認性と意味を確認したものを。

³ 「は」と「が」は日本語文法の最重要の問題の一つとされ、現在に至るまで数えきれない研究がなされている。西内（2015）では、次元形容詞の用法の分析にあたって、菅井（2002）が規定する『ガは叙述部（ドメイン）内における最高の顕著性を表す』特性を参考としている。すなわち、「が」のスキーマは『コト内の最も顕著なモノすなわち存在物を指示する』という規定である。本稿でもその立場をとっており、「所有者と所有物」「主体と属性」などの観点の必要性への考察はここでは省略する。

⁴ 本稿では、空間に関わる形容詞の総称として用いている。必ずしも一般的な総称ではないものの、本研究に関わる主要な論文で用いられる名称であり、本稿でも使用する。

⁵ 場所名詞であるかどうかをテストする方法としては、移動の経路・事物の存在場所や行為の場所を表せ、場所化成分がつかず、「どこ」で尋ねられ、「ここ・あそこ」で示すことができるかどうかを確認することがあげられる（田窪, 1984）。

⁶ 名詞に「～のところ」を付けることで、対象の名詞に場所性を付与すること。

⁷ 「は」によって示される主題は、省略されているものとする。

⁸ 慣習性とは「ある百科事典的意味を構成する要素が言語共同体で共有されている程度」、特徴性とは「ある百科事典的意味を構成する要素がその語が表す対象に独自のものである程度」、一般性は「ある百科事典的意味を構成する要素がその語が表すカテゴリーのどれだけの成員に当てはまるかという程度」、内在性は「ある百科事典的意味を構成する要素が、その語が表す対象に内在する程度」をいう。

⁹ 「アパートの全長」の要素が、一般性(+) 内在性(+) 慣習性(-) 特徴性(-)に対して、「アパートの価格」の要素は、一般性(-) 内在性(-) 慣習性(+) 特徴性(+)と分析した。

¹⁰ 「誇らしい」「自慢である」といった慣用的表現で表される意味はここでは扱わない。

¹¹ 鈴木（1967）では、顔面を地面に見立てて垂直上方に突き出た鼻を修飾するのに、他の部位と違って「出」（出っ歯）でも「長い」（顎が長い）でもなく「高い」が用いられるのは鼻の隆起に対する日本人の民族的価値観が修飾語の選択に関わっており、見るものの気持ちや態度が反映されていると考察されている。西内（2015）では、「鼻」はガ格の補完によって修飾される、場所性を欠いた実質名詞「人」の部分として扱ったが、鈴木（1967）で論じられる話者の観点は説得的であり、このような観点の反映は今後の課題としたい。

¹² 形式はトークン頻度に、規則はタイプ頻度に則るとされている。詳しくは Tomasello（2003）を参照されたし。

参考文献

- Langacker, R. W. (1987). *Foundation of Cognitive Grammar Vol. 1*. Stanford University Press.
- Tomasello, M. (2003). *Constructing a Language: A Usage-based Theory of Language Acquisition*. MA: Harvard University Press.
- 小矢野哲夫 (2005). 「形容詞」. 日本語教育学会 (編) 『新版日本語教育事典』 70. 東京: 大修館書店.
- 川端善明 (1957). 「形容詞文」. 『国語国文』 27: 12, 1-11.
- 北原保雄 (2010²). 『明鏡国語辞典』. 東京: 大修館書店.
- 久島茂 (2001). 『《物》と《場所》の対立—知覚語彙の意味体系—』. 東京: くろしお出版.
- 国広哲弥 (1970). 「日本語次元形容詞の体系」. 『言語の科学』 2, 13-26.
- 国広哲弥 (1982). 『意味論の方法』. 東京: 大修館書店.
- 菅井三実 (2002). 「構文スキーマによる格助詞「が」の分析と基本文型の放射状範疇化」. 『兵庫教育大学研究紀要』 21 (2), 175-191.
- 鈴木孝夫 (1967). 「天狗の鼻はなぜ高い」. 『言語生活』 191, 66-89.
- 田窪行則 (1984). 「現代日本語の「場所」を表す名詞類について」. 『日本語・日本文化』 12, 89-115.
- 西内沙恵 (2015). 「現代日本語における知覚形容詞「高い」の意味基準に関する一考察—場所名詞の観点から—」. 第15回日本認知言語学会全国大会ポスター発表.
- 西尾寅弥 (1987⁶). 『国立国語研究所報告 44 形容詞の意味・用法の記述的研究』. 東京: 国立国語研究所.
- 西村義樹・野矢茂樹 (2013). 「「村上春樹を読んでいる」—メトニミーをどう捉えるか」. 『言語学の教室』 141-182. 東京: 中央公論新社.
- 野田尚史 (1996). 『新日本語文法選書1「は」と「が」』. 東京: くろしお出版.
- 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子 (2001). 『日本語学習者の文法習得』. 東京: 大修館書店.
- 服部四郎 (1968). 「高イ, 低イとhigh, tall; low, short」. 『英語基礎語彙の研究 ELEC 言語叢書』 119-124. 東京: 三省堂.
- 三上章 (1960). 『象は鼻が長い』. 東京: くろしお出版.
- 籾山洋介 (1995). 「多義語のプロトタイプの意味の認定の方法と実際—意味転用の一方向性: 空間から時間へ—」. 『東京大学言語学論集』 14, 621-639.
- 森山卓郎 (1988). 「場所表現の類型—場所・方向・移動—」. 『日本語動詞述語文の研究』 東京: 明治書院.

資料体

国立国語研究所. 「中納言2.1.1」. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

付録1. 学習初期における導入手続きの例

対象の形容詞の多義への認識、被修飾名詞の特性、簡略な意味構造の表を順に完成させる。斜体による表記は学習者によって記入されることが望まれる部分の例である。

◇ Write down what mean the words 「高い」 of a~h.

◇ When you take a sense, you can use your language or Japanese.

a. このペンは ^{たか}高い。 (□ *expensive* □)

b. あの店 (store) は ^{たか}高い。 (□ *expensive* □)

c. 春さんは ^せ背が ^{たか}高い。 (□ *tall* □)

d. あの山は ^{たか}高い。 (□ *high* □)

e. Macのパソコンは ^{たか}高い。 (□ *expensive* □)

f. このマンションは ^{たか}高い。 (□ *expensive* □)

g. 陸くんは ^{はな}鼻が ^{たか}高い。 (□ *prominent* □)

h. 信号 (traffic lights) は ^{たか}高い (□ *tall* □)

◇ Classify the above sentences into 2 categories by property of the nouns.

category A <□ *place* □> (*b, d, f, h* □□□)

category B <□ *object / person* □> (*a, c, e, g* □□□)

◇ Guess what characterize have the nouns when mean <high /tall>, and when use a special sentence pattern [Topic は Specific point が Adjective です].

	place	object / person
<high /tall /prominent>	○	<i>need Specific point が</i>
<expensive>	<i>ordinary topic</i>	○